

生態学的意味論に基づくアイヌ語地名の分析

井上 拓也

An Analysis of the Ainu Place Names Based on Ecological Semantics

Takuya INOUE

要旨：アイヌ語地名研究は、正確な語源を特定する地名解をはじめさまざまな角度から研究が行われてきたが、特に地名の意味は、命名者の心のあり方や認知パターンといった側面から説明されることが多かったが、これはあくまで分析者の推論に過ぎず、さらには人々と場所との相互作用という側面を捉えきれないといった問題がある。そこで本稿は、人間と環境との相互作用に基づく生態学的意味論を採用し、その場所における知覚や行為の可能性すなわちアフォーダンスに基づいて分析する。これにより、実際の生態の構造と言語表現の表す概念構造の対応関係を明らかにする。

キーワード：アイヌ語地名 アフォーダンス 参照点構造 生態学的意味論 場所表現

1. アイヌ語地名の先行研究

本節では、アイヌ語地名¹に関する先行研究について網羅的に概観した後、特に意味論的分析を行っている先行研究における説明原理の問題点について取り上げる。それに対して、解決策としての本稿の立場を述べる。

1.1. 先行研究の概観

アイヌ語地名は、語源研究に限らず文化人類学や生態人類学、地理学や言語学など、さまざまな分野において研究の対象となってきた。アイヌ語地名の語源研究としては、永田方正（1891/1984）や更科源蔵（1966）、山田秀三（1984, 1993, 1995, 2000）などのいわゆる地名解が存在し、地名研究の貴重なソースとなっている。アイヌ語地名の文化的側面については、知里（1956）をはじめとして切替（2005, 2007）などが分析を行っている。生態人類学的観点からは、木村（1954）がサケ漁との関連、Hamada（2015）がニシン漁との関連で

¹ 本稿では、アイヌの人々によって名づけられたとされ、またアイヌ語の観点から程度意味が分析可能な地名を「アイヌ語地名」と定義する。アイヌ語地名は、北海道だけではなく本州の東北地方、樺太、千島列島にまで広く分布しているが、本稿では主に北海道におけるアイヌ語地名を扱う。

アイヌ語地名の分布に関する研究を行っている。地理学の観点からは、榊原（1998）や小木他（1999）がアイヌ語地名と土地の形状とを対応づける自然地理学的観点からの分析を行っている²。さらに、南（2014）や鈴木・中谷（2016）は、地質学や防災の観点からのアイヌ語地名研究を行っている。

言語学的には、佐藤（1977）がアイヌ語地名の頻用語について論じている。切替（2000）や佐藤（2005）、橋本（2008）はアイヌ語地名の形態論的分類を、田村（1982）や中川（1984）、井筒（2006）が統語論的記述について詳しく論じており、さらに田村（2003）や橋本（2008）、井上（2016, 2020）が認知言語学の観点から意味論的分析を行っている。

1.2. 先行研究に関する問題点

アイヌ語地名の研究に限らず、ことば意味の動機づけの説明においてよく見られるのが、いわゆる心理主義に基づく動機づけである。これは、「アイヌ語地名はアイヌの人々の心を表す」（松本・白糠地名研究会 1983）といった立場である。切替（2005: 5）は「地名の意味とは、その地名がアイヌ語を母語とする人の心の内に喚起するイメージのこと」であり「1人のアイヌ語の話し手の認識」を反映したものであると述べている。しかし、アイヌの人々の「心の内に喚起するイメージ」や「話し手の認識」は、あくまで地名からの推論によるものであり、実証的な根拠に基づくものではない。したがって心理主義に基づく動機づけは、あくまで分析者の想像の域を出るものではない。

近年は、話し手の認知の観点から意味を動機づける認知主義的な立場も見られる。これは「言語表現は人間の認知を反映する」というテーゼを掲げる認知言語学（*cognitive linguistics*）の立場である。橋本（2008: 287）は、「地名解は認知言語学的必然性の観点からも、かなりの程度、検証に耐えうる研究対象」であり、「我々が何の変哲もない地名として見過ごしている地名の中に（こそ）意外と、その命名者である人種／民族／地域住民たちの事物・事象に対するものの見方（認知パターン）やその土地固有で興味深い歴史や郷土文化を反映しているものが少なくないように思われる」と述べている。このような説明原理は一見科学的に妥当なように思われる。しかしながら、認知パターンも「心の内に喚起するイメージ」と同じく実験的に測定されたものではなく、あくまで地名から推論されたものである。これは実質的に心理主義と変わらないもの、あるいは心理主義を現代的に言い換えたものに過ぎない³。

アイヌ語地名は、個人の心理状態や認知パターンを反映しているというよりも、集団としての人々と場所との相互作用の中で名づけられてきたものである。しかし、地名解は地形や特徴を地名の意味として挙げるだけにとどまっており、人々と土地との相互作用の側面を捉えることはできないのである。

1.3. 本稿の立場

本稿は、心理主義や認知主義の実証性の問題を回避し、相互作用の側面を含めた分析とす

² アイヌの人々に関する地理学的研究については伊勢（2004）が総覧をまとめている。

³ さらに、認知パターンから言語の意味を説明すると同時に言語の意味から認知パターンを説明するという、いわゆる循環論が生じてしまっている（井上 2018）。

るために、人間と環境の相互作用を分析の中心とする生態学的な観点（Gibson 1979）に基づく言語観を採用する。生態学的言語観（リード 2000）によれば、人間は言語を用いて環境との相互作用における自らの知覚・行為を調整する。ことばの意味は、人間と環境が形成する系（人間・環境系）における行為の可能性すなわちアフォーダンス（affordances）として定義される（河野 2003, 染谷 2017）。本稿では、アフォーダンスを反映することばの意味を「生態学的意味」と呼ぶ。

生態学的な観点からすれば、単なる場所の地形の特徴の叙述とされてきたアイヌ語地名も、その土地の利用者であるアイヌの人々にとっての生態学的意味を有するものとして分析される。これにより、話し手の心理状態や認知パターンに還元するのではなく、実際の環境との相互作用に即した議論が可能となるのである。

本稿の2節では、まずアイヌ語地名の形態論的・統語論的・意味論的特徴を概観する。3節ではアフォーダンス理論および言語の位置づけを確認するとともに、地名を生態学的な観点から分析した研究を参照する。そして4節では、アイヌ語地名を修飾部の表す意味に基づいて分類し、それぞれの生態学的意味について考察する。

2. アイヌ語地名の言語学的特徴

本節では、議論の前段階として、アイヌ語地名の言語学的特徴（形態論的・統語論的・意味論的特徴）について確認する。

2.1. 形態論的特徴

切替（1984, 2000）や佐藤（2008）は、アイヌ語の一般的な名詞句の形態的な分析において地名を一部扱っているが、本稿では橋本（2008）の分類を参考にアイヌ語地名の形態的なパターンを概観する（以下、アイヌ語地名には特定できる限り「」内に現行行政地名および所在市町村名を記す）。

A. 主要部を持つパターン[修飾部＋主要部]

- a. [名詞＋名詞] 例) nitat-nay [湿地-沢] 「仁達内（浜頓別町）」
- b. [名詞＋位置名詞] 例) pira-utur [崖-～の間] 「平取（平取町）」
- c. [連体詞＋名詞] 例) atusa-nupuri [裸の-山] 「アトサヌプリ（弟子屈町）」
- d. [自動詞⁴＋主語相当語] 例) hure-nay [赤い-沢] 「振内（平取町）」
- e. [主語＋他動詞＋目的語相当語／斜格語相当語]
例) ku-oma-nay/i [仕掛け弓-～にある-沢/処] 「雲内（せたな町）」
- f. [目的語＋他動詞＋主語相当語／名詞的接尾辞]
例) mak-un-pet [山側-～に入る-川] 「マクンベツ（石狩市）」
- g. [主語（所属物）＋自動詞＋斜格語相当語] 例) putu-wen-nay [河口-悪い-沢]

⁴ アイヌ語の形容詞は「～である」という意味と同時に「～になる」という自動詞の意味を併せ持つ。例えば、*poro*「大きい」という形容詞には「大きくなる」という意味もある。そのため橋本（2008）では、アイヌ語の形容詞は自動詞として分類されている。

b. inkar -us -i
眺める -いつもする -処 「遠軽（遠軽町）」

III. 目的語相当名詞- V（二項動詞）-処（-i/-p あるいは場所を表す名詞）

この分類の地名に含まれる動詞もまた、一回限りの行為ではなく、その場所における習慣的な行為を表すとするのが妥当である。

(3) a. ap -ta -pet
釣り針 -作る -川 「虻田（虻田町）」
b. ki -ta -p
茅 -刈る -処 「霧多布（浜中町）」

(3) における目的語抱合自動詞 *ap-ta*「釣り針を作る」や *ki-ta*「茅を刈る」は、いずれもその場所での習慣的な動作を表している。

2.2. 統語論的特徴

アイヌ語地名には *poro-pet*「大きい-川」や *si-kot*「大きい-くぼみ」などのように、その場所の特徴をそのまま叙述したようなものや、*ci=kus-ru*「我ら-通る-道」など、主格接辞を伴う動詞を含むものも存在する。このようなアイヌ語地名はもちろん固有名詞であるが、形態論上は一般名詞（句）と区別することができない。

しかしアイヌ語地名は場所表現において用いられる場合に一般名詞（句）と異なる振舞いをする。田村（2003）は場所表現の統語論的制約について以下のように説明している。

アイヌ語には、《場所》として扱われる名詞句を前置させる格助詞が4つある。その4つとは、*ta*「～で、～に」、*peka*「～を、～を通って」、*un*「～へ」、*wa*「から」である。ここで《場所》と呼ぶのは、《場所》である *Sapporo*「札幌」は格助詞 *ta* の前にそのまま置けるが、《場所》ではない *pet*「川」や *cise*「家」は *ta* の前に位置名詞 *or*「～の処」を後置させると《場所》として扱われる現象のことである。位置名詞とは、「空間的・時間的位置関係」を表す形式で、多くは NP+PN の PN の位置に入って、その物や人（NP）に対する位置関係を表す」（田村 1982）と説明される形式である。

（田村 2003: 193）

場所表現において *pet*「川」や *cise*「家」などの一般名詞は通常《場所》として扱うことはできず、格助詞をそのまま後置させることはできない。《場所》として扱うためには、*or*「～の処」や *ka*「～の上」、*corpok*「～の下」などの位置名詞を後置する必要がある⁵。

⁵ 本稿におけるアイヌ語（沙流方言）の文例は、特に断りのない限り筆者による作例である。

(4) a. ?? cise ta ku= hosipi.

家 に 私= 帰る

b. cise or ta ku= hosipi.

家 処 に 私= 帰る

「私は家に帰った。」

日本語では「家」は《場所》とみなされるため「～の処」を後置すると不自然となるが、アイヌ語の *cise* 「家」の場合は (4b) のように *or* 「～の処」を後続させる必要がある。

一方で、指示詞や所属形を伴う一般名詞、*kim* 「(狩場としての) 山」などのいわゆる場所名詞、そして地名⁶は《場所》として扱われ、位置名詞は省略される。

(5) a. *nean cise ta hosippa =an.*

その 家 に 帰る =私

「私はその家に帰った。」

b. *an= kor cise ta hosippa=an.*

私= 持つ 家 に 帰る =私

「私は自分の家に帰った。」

(井筒 2006: 18-19)

(4a) では *nean* 「その」という指示詞を伴っているため *nean cise* 「その家」は《場所》として扱われる。また (4b) では *an=kor cise* 「私=持つ 家」つまり「私の家」という所属形になっているため、名詞句全体が《場所》として扱われ、位置名詞が省略される。

次に、場所名詞と地名の例を挙げる。

(6) a. *kim ta k= arpa.*

山 に 私= 行く

「私は山に行く。」

b. *Satporo un k= arpa.*

札幌 へ 私= 行く

「私は札幌に行く。」

c. *Sapporo or un k= arpa.*

札幌 処 に 私= 行く

「私は札幌に行く。」

(6a) のように、*kim* 「(狩場としての) 山」のような場所名詞が用いられる場合は、位置名詞は必ず省略される。一方で、(7b-c) のように地名が用いられる場合は、位置名詞の省略は任意となる。

場所表現におけるこの文法的制約は、地名と普通名詞とを区別する際に重要な役割を果たす。アイヌ語では、音形で地名と普通名詞とを区別することはできない。例えば *Ponpet* 「本別 (地名)」と *pon pet* 「小川 (本流に対する支流、子川)」のように、地名と普通名詞

⁶ アイヌ語地名も場所名詞として分類されることがあるが、本稿では混乱を避けるため、固有名詞ではなくかつ位置名詞を伴わない名詞のみを場所名詞と呼称する。

(句) は音形では区別できない。しかし、位置名詞の省略可能性で以下のような差が生じる。

- (7) a. *Ponpet un k= arpa.*
本別 に 私= 行く 「私は本別に行く。」
- b. *pon pet or un k= arpa.*
小さい川 処に私= 行く 「私は小さい川に行く。」

(7) のように、地名 *Ponpet* と普通名詞 *pon pet* とは、位置名詞の省略可能性の有無によって区別することが可能である⁷。

2.3. 意味論的特徴

井上 (2016, 2020) は、アイヌ語の場所表現の適格性について、参照点構造 (Reference-point structure, Langacker 1993) の有無という観点から分析している。参照点構造とは、ある目標物を指示する際に、より際立ちが高く簡単に見つけられるもの、すなわち「参照点 (reference point)」を経由するという概念構造のことである。木が立っているとすれば「木の下」、「木の前」などのように、「木」を参照点として目標となる地点が言語化 (指示) される。井上 (2016) は、名詞 (句) の持つ概念構造に参照点構造を有することが、場所表現において適格となることに関与しているとしている。

また井上 (2020) は、アイヌ語地名の概念構造として、その場所で実現される知覚や行為の経験可能性が参照点となり、地名全体で表される場所が目標となる参照点構造を有することを指摘している。つまり、場所の提供する知覚や行為の可能性そのものが、メトニミー的にその場所を指示するために用いられる参照点となるということである⁸。

本稿では、特定の経験や知覚・行為可能性と場所が結びつけられる動機づけについて、生態心理学の観点から分析する。次節では、環境が提供する知覚や行為の可能性すなわち「アフォーダンス」の概念を導入する。生態学的な言語の位置づけについても確認する。

3. アフォーダンス理論と地名研究

本節では、まずアフォーダンス理論の基本的な考え方を概観した上で、アフォーダンス理論の観点から言語がどのように位置づけられ、またアフォーダンスがどのように言語表現と対応するのかについて述べる。さらにアフォーダンスの観点から地名を分析した先行研究を参照し、アイヌ語地名の概念的な分析に応用する手がかりとする。

3.1. アフォーダンス理論の概要

⁷ アイヌ語地名は必ず位置名詞が省略されるわけではない。例えば、*Ponpet or un k=arpa*。「私は本別に行く」のように、地名であっても位置名詞を伴うことは可能である。

⁸ 井上 (2020: 63) は、Levinson (2003) が提案した空間的な位置関係に基づく空間参照枠を拡張し、場所とそこでの知覚・行為の可能性というメトニミー的な関係を基盤とした参照枠としての「経験参照枠」を提唱している。

アフォーダンスとは、環境が人間に対して提供する知覚や行為の可能性である (Gibson 1979, 佐々木 1994)。例えば、人間にとって椅子は〈座る〉ことをアフォードし、りんごは〈食べる〉ことをアフォードする。また、川は〈泳ぐ〉ことや〈漁獵する〉ことをアフォードし、山は〈登る〉ことや〈狩獵する〉ことをアフォードする。川や山のようにさまざまなアフォーダンスが存在する場所を「生態学的ニッチ (ecological niche)」と呼ぶ (Gibson 1979: 128)。

3.2. 生態学的な言語観

生態学的な観点からコミュニケーションについて論じているリード (2000) は、人間の言語について以下のように論じている。

言語はそれによって人々の集団が自分たちの行為と相互行為とを調整する過程の一部として生態学的に理解することが可能だ。エコロジカルな情報は個体の行為の調整に役立つ。高等動物の多くは他者に提示するために情報を選択・産出する能力を進化させてきた。言語とは、その進化が更に進み、動物が産出するこの情報が個体の集団の活動と意識の調整に役立つようになったものである。言語は主観的観念にではなく、エコロジカルな情報に由来するのだ。

(Ibid.: 324)

この議論に則り、染谷 (2017) は言語の役割について「環境内のより詳細な性質を特定するエコロジカル情報をピックアップする活動を補助し、他者や自己の認知活動・行為をガイドし、方向づけ、組織化し、コントロールすることにある」(ibid.: 176) と論じている。「エコロジカル (な) 情報」とは、アフォーダンスを特定するために用いられる環境の特性のことである。また、言語によるコミュニケーションは「各主体に内在する非言語的観念や思考内容を表現にもたらし、それを伝達する過程ではない」(ibid.: 184) としている。生態学的な観点からすれば、言語は主観的な観念や思考を伝達するものではなく、環境における行為を調整するものとして位置づけられるのである。

このような生態学的言語観に即して考えるならば、アイヌ語地名の名づけという行為は、その場所において他者や自己の認知活動・行為をガイドし、方向づけ、組織化し、コントロールするための活動の一部として捉えることができる。

3.3. アフォーダンス理論に基づく地名研究の実例

アフォーダンスという概念を用いて地名を分析している先行研究として、Levinson (2008) と Thornton (2011) の研究が挙げられる。以下では、それぞれどのような分析がなされて良いかを確認する。

Levinson (2008) は、パプア・ニューギニアの Rossel 島の Yéli Dnye 語における地理的語彙や地名に関する分析を行っているが。土地の名づけ方は一般的に次のような3つのカテゴリーを反映していると仮定している。

1. 知覚や認知的際立ちに基づくカテゴリー。すなわち、山、川、湖、崖などといった普遍的なカテゴリー。
2. その土地の持つアフォーダンスによるカテゴリー。生活のパターンや、生体環境と移動技術などによる体系的バリエーション。
3. 概念的枠組と文化的信仰に基づくカテゴリー。すなわち普遍的な認知や宇宙観、あるいは宗教的信仰。

しかし Yéli Dnye 語には、1. に相当する普遍的なカテゴリーは存在しないという。例えば普遍的なカテゴリーとしての川という語彙は存在せず、カヌーで通行可能か否かというアフォーダンスの観点から3つの語彙 (*pye*, *mbwaa*, *kpe*) に分類されるという⁹。つまり、環境のカテゴリー化において、その対象がどのように利用可能なのか、といったアフォーダンス的な視点から分類されているといえる。

Thornton (2011) は、南東アラスカに住む Tlingit 族の地名の分析に関して、4つの認知モードに基づく分類を提唱している。Tlingit 語の地形語彙は、この4つのカテゴリーの組み合わせによって表されるという。

1. 知覚 (perception)
2. アフォーダンス (affordance)
3. 習慣 (habitual)
4. (物理的/精神的) 制御力 (controlling force)

このうち2. のアフォーダンスが関わる事例として、Tlingit 語には一般的な島を表す語彙に *x'aat'* と *daa* の2つが挙げられている。*x'aat'* は島の内側を表すが、*daa* は島を取り巻く海洋の環境を特定する語彙である。*Guwakaan X'aat'i*¹⁰ という地名は「鹿の島」という意味であるが、これは、〈(獲物としての) 鹿が捕れる〉という島の持つアフォーダンスを表している。これは Tlingit 族の文化的興味を反映した名づけであるという。一方で *Tandaa* は「飛び跳ねる魚 (が周りにいる島)」という意味である。これは、特定の時期に島の周りを魚が飛び跳ねるといふ海洋の環境を表すと同時に、(サケ・マスといった) 魚を〈漁獵する〉というアフォーダンスを表している。このように、Tlingit 語の地名は、その場所で獲れる動物といったアフォーダンスを反映しているといえる。

Levinson (2008) と Thornton (2011) のいずれの分析においても、アフォーダンスは鍵と

⁹ *pye* 「海水の水路」は、水路として十分な広さを持っている川を意味する。このような水路は十分な広さと深さを持っているため、〈カヌーで通る〉ことが可能であるだけでなく、〈魚釣り〉や〈停泊〉にも用いることが可能であるという。それに対して *mbwaa* 「淡水」は、ウナギやエビ、淡水魚等の生息地であるだけでなく、〈飲む〉ことや〈洗う〉ことを可能にする (ただし、料理に使うことはないという)。一方で *kpe* は、「大雨が降った時にのみ現れる泥水の筋」を表すため、〈飲む〉や〈洗う〉などの行為をすることは不可能であるという。

¹⁰ *X'aat'i* 「～の島」における *-i* は所属を表す接尾辞である。

なる概念である。本稿ではこれらの分類・分析を参考にしつつ、アイヌ語地名もまた生態学的ニッチにおけるアフォーダンスを反映した言語表現として分析する必要があると考える。

4. 生態学的意味論に基づくアイヌ語地名の分析

本節では、アイヌ語地名を修飾部の意味に基づいて分類し、参照点構造の観点から分析する。そして生態学的意味論の観点から、地名の示す場所の提供するアフォーダンスについて考察する。

4.1. アイヌ語地名の分類

本稿では、「北海道環境生活部総務課アイヌ施策推進室アイヌ語地名リスト」(以下、「アイヌ語地名リスト」と呼称)の1059例の地名を対象に分類を行った。「アイヌ語地名リスト」には、秦穂麿、上原熊次郎、松浦武四郎、永田方正、知里真志保、更科源蔵、山田秀三、萱野茂などによる地名解が併記されている。これらの地名解に基づきつつ、小木他(1999)や井上(2020)の分類法を参考に、アイヌ語地名を修飾部の表す意味に基づいて以下のa～eの5つに分類した。

アイヌ語地名の5分類

- a. 様態 (大小、色、匂いなどによって修飾されているもの)
- b. 動植物 (魚や鹿、あるいは植物等が多く生息する処と表現されるもの)
- c. 位置関係 (「崖の端」や「丘の麓」などといった他の地形に対する位置関係)
- d. 小地名 (「大きい方の幌別」など、既存の地名から派生したもの)
- e. 習慣的行為 (習慣や生活に関するもの)

以下の表1に、「アイヌ語地名リスト」の分類結果を記す。なお、日本語由来の地名はw、由来が不明なものは?とした。

表1 修飾部の意味に基づく地名の分類結果

分類	頻度	割合 (%)
a. 様態	472	44.57
b. 動植物	247	23.32
c. 位置関係	48	4.53
d. 小地名	74	6.99
e. 習慣的行為／経験	131	12.37
w. 日本語地名	63	5.95
?. 不明	24	2.27
合計	1059	100

4.2. 参照点構造の観点からの分析結果

アイヌ語地名の修飾部の意味に基づく分類のそれぞれに対して、参照点構造の観点からの分析を行った。以下にその結果を示す。

4.2.1. a. 様態（場所の特徴を参照点とするもの）

この分類に含まれる地名は、その場所の様態（大小、色、匂い、自然の特徴などによって修飾されているもの）に基づいて場所が指示されるというメトニミー的な概念構造を有している。

4.2.1.1. a-1 場所の特徴

この分類には、色や匂い、大小といった場所の特徴が参照点となっている地名が含まれる。

- (8) a. *hure -nay*
赤い-川（沢） 「振内（平取町）」
- b. *hura -nu -i*
匂い -〜がする -もの（川） 「富良野（富良野市）」

(8a) や (8b) の地名は、*hure* 「赤い」や *hura-nu* 「匂いがする」といった特徴が参照点となり、*hure-nay* 「赤い川」*hura-nu-i* 「匂いがするもの（川）」という場所が目標となる参照点構造を有する。

- (9) a. *poro -pet*
大きい -川 「幌別（登別市）」
- b. *pon -pet*
小さい -川 「本別（本別町）」
- c. *si -pet*
親 -川 「士別（士別市）」

(9a) の「*poro* 「大きい」や (9b) の *pon* 「小さい」のように大きさを表す連体詞がついた地名の例は、環境に存在する比較対象を参照点とし、当該の川を目標とする参照点構造を有すると考えられる。つまり、一般的に大きい・小さいという性質を持つ川という意味ではなく、大小異なる川があるうちの大きい方・小さい方、という対比の中で用いられているということである。もっとも、本流と支流という関係性が明確な場合は (9c) のように *si*-「親（の）、本当の）」という連体詞が用いられ、*si-pet* 「親の川」・*pon-pet* 「子の川」という対立関係で表される。

4.2.1.2. a-2 様態

この分類には、主に地形などの物理的特徴を、他の物体にたとえている地名が含まれる。

- (10) a. *kot -ne -i*

窪地 -のような-処	「琴似（札幌市）」
b. <i>muy -ne -sir</i>	
箕 -のような-山	「無意根山（京極町）」

(10a) の *kot-ne* 「窪地のような」や (10b) の *muy-ne* 「箕のような」といった見た目の特徴が参照点となっており、*kot-ne-i* 「窪んでいる処」・*muy-ne-sir* 「箕のような山」といった名詞句全体が目標となる場所を指示するという参照点構造を有する。

4.2.1.3. a-3 動態

この分類には、主に川や沢の特徴を描写する際に、川や沢が動く生物であるかのように擬似的に捉えている地名が含まれる¹¹。

(11) a. <i>horka -nay</i>	
逆戻りする -沢	「幌加内川（幌加内町）」
b. <i>mak -oma -nay</i>	
山奥 -入っている -沢	「真駒内（札幌市）」

(11a) の *horka* 「逆戻りする」や (11b) の *mak-oma* 「山奥に入っている」といった動詞は、沢や川の流れを、沢の見かけ上の動きとして表している。この場合は、沢の見かけ上の動きが際立ちの高い参照点となり、沢全体を目標とする参照点構造がみられる。

4.2.1.4. a-4 存在

この分類の地名は、存在を表す動詞 (*us*、*un* など) が用いられており、ある場所に存在する際立った存在物を参照点として、名詞句全体が目標となる場所を指示するという参照点構造を有する。

(12) a. <i>ota -us -nay</i>	
砂浜-付いている -沢	「歌志内（砂川市）」
b. <i>so -un -pet</i>	
滝 -ある -川	「層雲別川（東川町）」

(12a) の *ota* 「砂浜」や (12b) の *so* 「滝」といった、それぞれの場所に存在・生起する物体・現象そのものが認知的際立ちの高い参照点となっており、それぞれ *ota-us-nay* 「砂浜が付いている川」・*so-un-pet* 「滝がある川」という名詞句が目標となる場所を指示する参照点構造があるといえる。

4.2.2. b. 動植物（その場所における動植物を参照点とするもの）

この分類には、ある場所において生息している動植物などを代表させて名づけられた地

¹¹ アイヌ語における川の概念化の方略についての解説は脚注 13 を参照。

名が含まれる。この分類の地名は、その場所で採取できる動植物などが参照点となり、メトニミー的にその場所を指示するという参照点構造を有する。

- (13) a. *ayusni -us -i*
 センの木-群生する-処 「愛牛（浦幌町）」
 b. *hup -us -nupuri*
 榎松-群生する-山 「風不死岳」
 c. *yuk -turasi -pet*
 鹿 -～に沿って登る-川 「幾寅（南富良野町）」

(13a) では、*ayusni-us*「センの木-群生する」という植物の存在が参照点となり、*ayusni-us-i*「センの木が群生する処」が目標となる場所概念を表す。(13b) や (13c) も同様に、*hup-us*「榎松-群生する」や *yuk-turasi*「鹿-それに沿って登る」という動植物の存在が参照点となり、*hup-us-nupuri*「榎松が群生する山」・*yuk-turasi-pet*「鹿がそれに沿って登る川」がそれぞれ場所を指示しているといえる。

4.2.3. c. 位置関係（他の地形に対する相対的な位置関係）

この分類の地名は、「崖の端」や「丘の麓」などのように、もともと存在する地形が参照点となり、地名全体で目標となる場所を指示する。アイヌ語において川の位置関係を表す時に身体部位名詞が用いられる。このためアイヌ語地名の多くは、身体のもたファーに基づく参照点構造の観点から分析が可能である¹²。

- (14) a. *ut -nay*
 肋骨-沢 「ウトナイ湖（苫小牧市）」
 b. *sir -not*
 大地-あご 「篠津（江別市）」

(14a) は、「この湖（ウトナイ湖）を水源とする川に両岸からいくつもの小河川が合流するさまを、背骨と肋骨にたとえた命名である」（山田 2000: 127）という。この場合は背骨にたとえられる川が参照点であり、肋骨にたとえられる小河川が目標となる参照点構造がある。また (14b) の例は、丘陵が平野部に突き出した様子を *not*「(山の) あご」とたとえており、丘陵全体が参照点、突き出した部分が目標となる参照点構造がある¹³。

¹² アイヌ語地名の川の捉え方は、Lakoff and Johnson (1980) の概念もたファーの観点からすれば、身体部位を起点領域、地形を着点領域とするもたファー写像であり、実際の空間的位置を把握するための方略であるといえる。

¹³ 知里 (1956) によれば、「古い時代のアイヌは、川を人間同様の生物と考えていた」という (ibid.: 40) としている。川は、海から立ち上がって陸へと這い上がる生物のように考えられていたという。それゆえ河口は「口」ではなく「陰部」であり、水源は「頭」と表現される。また「アイヌの古い考え方からすれば、山もまた生物」であり、山頂は「頭」は、平野部に出ている部分は「鼻」、平野部に出ている切り立つ

4.2.4. d. 小地名（他の地名を参照点とするもの）

以下に示す地名は、元となる地名（大地名）と比較して相対的に小地名¹⁴と呼ばれる。

- (15) a. pon- satoporo
 小さい- 札幌川 「中の川（札幌市）」
 b. hatsam -putu
 発寒川 -口 「伏古川口（札幌市）」

小地名の場合は、既知の地名（大地名）を参照点として目標としての地名（小地名）を指示するという参照点構造を有している。

4.2.5. e. 習慣的行為（その場所での行為を参照点とするもの）

「アイヌ語地名リスト」から地形の特徴が修飾部に表れていない例を収集したところ、155例が集まった（日本語地名を除く）。このうち習慣的な行為を表すものが131例あった。これらの地名をさらに以下のように3種類に分類した。

4.2.5.1. e-1 我ら (a=/ci=) -V（二項動詞、三項動詞）- 処 (-il-p または場所を表す名詞）

この分類には、人称接頭辞を含む地名が含まれる。以下に代表的な例を挙げる。

- (16) a. a= pes -nay
 我ら（包括形）= ～に沿って下る -沢 「安平志内（中川町）」
 b. ci= kus -pet
 我ら（除外形）= 通る -川 「秩父別（秩父別町）」

(16a)に見られる動詞 *pes*「下る」や(16b)に見られる動詞 *kus*「通る」は、いずれも場所（沢・川）の持つアフォーダンスを表している。ここでは、〈下る〉や〈通る〉といったアフォーダンスが参照点となっており、そしてその行為が実現される場所そのものが目標となっているという参照点構造を有する。

4.2.5.2. e-2 V（二項動詞）-us - 処 (-il-p または場所を表す名詞）

この分類は、*us*「いつも～する」という習慣性を表す語が形態的に含まれる。

- (17) a. rar -us -i
 泳ぐ -いつもする -処 「良瑠石（北檜山町）」
 b. riya -us -to
 越冬 -いつもする -湖 「リヤウシ（網走市）」

た崖は「あご」、山の中腹は「腹」、山の麓は「下腹部」というように、身体部位名詞と地形とが対応している (ibid.: 49)。

¹⁴ このような小地名の存在は、場所表現の制約とともに、アイヌ語において地名という固有名詞のカテゴリが存在するというを示す重要な証拠の一つであるといえる。

(17) の例では「いつも～する」という習慣的な動作を表す *us* が用いられている。*rar-us* 「泳ぐ-いつもする」や *riya-us* 「越冬-いつもする」というその場所での習慣的な経験が参照点となり、地名全体で場所を指示するという参照点構造があるといえる。

4.2.5.3. e-3 目的語相当名詞-V (二項動詞) -処 (-*i/-p* または場所を表す名詞)

この分類は、以下の例のように動作の主体が表されていないもので、かつ日常生活における習慣的な行為を表す動詞 (*ta* 「作る、刈る」など) が含まれる。

- (18) a. *ap* -*ta* -*pet*
釣り針 -作る -川 「虻田 (虻田町)」
- b. *ki* -*ta* -*p*
茅 -刈る -処 「霧多布 (浜中町)」

4.3. 考察

ここでは、4.2 節の 5 つの分類を踏まえて、生態学的意味論の観点からアイヌ語地名を分析する。c および d は単に空間的な位置関係を表すため説明を省略するが、特に人々の知覚や行為を反映している a、b および e の分類について考察する。

4.3.1. a. 様態

アイヌ語地名の示す土地の様態は、生存あるいは生活にとって実用的で重要な情報であるといえる。例えばアイヌ語地名で頻出する *poro-pet* は、ただ「大きな川」というだけではなく、生活圏の境界としての役割や他地域との交易のための交通路といった実用的な意味を有する。また *pon-pet* は「小さい川」という意味だけではなく、生活用水を汲み取る場所といった生態学的な意味を見出すことが可能である¹⁵。*hure-nay* 「赤い-沢」は、単に赤みがかかった川という知覚的特徴を報告するだけではない。その沢の水は鉍物質を豊富に含んでいるか、あるいは湿地特有の「やち水」であるため、飲水には適さないという生態学的意味を含んでいる (山田 1995: 76)。*huranu-i* 「匂いのある-もの (川)」もまた、単に〈匂いがする〉という知覚的特徴を示しているだけではなく、その川の水は硫黄分を含んでいるため〈飲む〉には適さず、誤って飲んでしまうと〈健康を害する〉恐れがある、という情報を特定させる¹⁶。アイヌ語地名は、このような生存に関わる情報を特定させる機能を持つのである。

4.3.2. b. 動植物

動植物を含むアイヌ語地名は、その場所が持つ〈狩猟・採集をする〉というアフォーダンスを特定する。例えば *ayusni-us-i* 「センの木-群生する-処」における *ayusni* 「センの木」は、

¹⁵ 佐藤 (1977: 16) によれば、魚や食料がたくさん取れる (大事な) 川を *poro-pet* 「大きい-川」と呼び、それに対して「あまり役に立たない川」を *pon-pet* 「小さい-川」呼ぶこともあるという。

¹⁶ *huranu-i* 「匂いのある川 (富良野川)」の水の持つ毒性については、松浦武四郎の『十勝日誌』(松浦・丸山 1975) にその記述がある。

丸木舟や臼、杵などの大型器具を作る際に使われるため、〈伐採する〉という行為をアフォードする。*hup-us-nupuri*「榎松-群生する-山」における *hup*「榎松」は、冬場の狩りのときに冬でも葉が茂っているこの木の枝で猟小屋をつくるため、〈採集する〉という行為をアフォードする。*yuk-turasi-pet*「鹿-~に沿って登る-川」における *yuk*「鹿」は、アイヌの人々にとっては主な食糧であるため〈狩猟する〉という行為をアフォードする。

4.3.3. e. 習慣的行為

この分類における地名に含まれる動詞は、その場所の持つ習慣的なアフォーダンスを表しているといえる。例えば *pes*「下る」は、〈(川に沿って) 下る〉という川のアフォーダンスを表しており、また *kus*「通る」は、通路としての川のアフォーダンスを表している。また、*rar*「泳ぐ」や *riya*「越冬する」、*ap-ta*「釣り針を作る」や *ki-ta*「茅を刈る」といった行為も、一回限りの行為ではなく、その場所の習慣的なアフォーダンスを反映していると考えられる。

4.3.4. まとめ

以上の分析をもとに、アイヌ語地名と日本語訳、および地名によって特定される習慣的なアフォーダンスを表2として整理する。

表2 アイヌ語地名と場所の習慣的なアフォーダンス¹⁷

アイヌ語地名	日本語訳	場所における習慣的なアフォーダンス
<i>poro-pet</i>	大きな-川	〈交通する〉
<i>pon-pet</i>	小さい-川	〈生活用水を汲む〉
<i>hure-nay</i>	赤い-川	〈飲用できない〉
<i>hura-nu-i</i>	匂い-~がする-もの (川)	〈飲用できない〉
<i>ayusni-us-i</i>	センの木-群生する-処	〈センの木を伐採する〉
<i>hup-us-nupuri</i>	榎松-群生する-山	〈榎松を採集する〉
<i>yuk-turasi-pet</i>	鹿-それに沿って登る-川	〈鹿を狩猟する〉
<i>a=pes-nay</i>	我ら=下る-沢	〈下る〉
<i>ci=kus-pet</i>	我ら=通る-沢	〈通る〉
<i>rar-us-i</i>	泳ぐ-いつもする-処	〈泳ぐ〉
<i>riya-us-to</i>	越冬する-いつもする-処	〈越冬する〉
<i>ap-ta-pet</i>	釣り針-作る-川	〈釣り針を作る〉
<i>ki-ta-p</i>	茅-刈る-処	〈茅を刈る〉

ある場所がアフォードする行為の可能性は、大きな環境の変化がない限りは変化しない。

¹⁷ 表2で示したアフォーダンスは、あくまで地名から読み取れるものの一例にすぎず、原理的にその場所での習慣的なアフォーダンスが一意に定まるということでは決してない。逆に、その場所が複数のアフォーダンスを提供し、それらに対応する複数の地名によって名づけられているという可能性もある。むしろ、地名およびアフォーダンスの複数性を探っていくことこそが、今後のアイヌ語地名研究においては重要であるといえるだろう。

文化的な習慣は、環境と行為主体との関係性がそこにおいて習慣化しており、恒常的なものでなければ成立しない。したがって多くの世代に渡って同じ行動が繰り返される、または同じ個体に対していつも同じ行為をアフォードする場合、その場所を指示する言語表現として地名は機能するのである。

5. 結論と今後の展望

通常の意味論的分析が主観的な意味づけを分析の出発点にするのに対し、生態学的意味論は、人間と環境の相互作用を分析の出発点としており、生態学的ニッチにおいて提供される恒常的な知覚・行為の可能性としてのアフォードダンスが記述対象となる。こうした観点から、アイヌ語地名は生態学的ニッチとしての土地や河川などにおける習慣的な行為を反映したテキストとして分析される。

本稿で提案した生態学的意味論に基づくアイヌ語地名分析に際しては、あくまでその場所での歴史的・文化的実践に関する知見に即し、研究者による恣意的な分析とならないように努める必要がある。また、アイヌ語地名の生態学的意味論の観点からの研究を精緻に行う際には、アイヌの人々が実際にその土地をどのように利用していたかという、文化人類学や生態人類学の知見が必要となる。例えば *kot-ne-i* 「窪地のような処」や *horka-nay* 「逆戻りする沢」といった地名がどのような生態学的意味を持つのかについて、本稿では考察を深めることはできなかった。今後は、アイヌ語地名の持つ生態学的意味を明らかにするだけでなく、アイヌ語の修飾語一般の持つ生態学的意味を分析することも課題としたい。

謝辞

本稿の完成に際し、貴重なコメントを寄せてくださった2名の匿名査読者の方々、並びに Tlingit 語の地名の意味をご教示いただいた京都工芸繊維大学の林千恵子教授に心からお礼を申し上げます。

参考文献

- 知里真志保 (1956) 『アイヌ語地名事典』札幌: 北海道出版企画センター。
- Gibson, James J. (1979) *The Ecological Approach to Visual Perception*. Boston: Houghton Mifflin.
- Hamada, Shingo (2015) Ainu geographic names and an indigenous history of the herring in Hokkaido. *The Canadian Journal of Native Studies* 35(2): 43–58.
- 橋本学 (2008) 「名称論への学際的アプローチ: 地名研究をケース・スタディとして」『言語と文化・文学の諸相』287–306.
- 井上拓也 (2016) 「アイヌ語の場所表現に関する記述的研究: 認知言語学的観点から」『言語科学論集』22: 1–23.
- 井上拓也 (2018) 「認知言語学の批判的検討: 生態学的言語観への転換」『日本認知科学会第35回論文集』409–417.
- 井上拓也 (2020) 「アイヌ語地名の意味構造の分析: 参照点構造の観点から」『近畿大学教養・外国語教育センター紀要 (外国語編)』11(1): 47–66.

- 伊勢寛（2004）「戦後のわが国におけるアイヌに関する地理学的研究の展開」『新地理』51(4): 1-12.
- 井筒勝信（2006）「アイヌ語文法の概要」井筒勝信（編）『I/YAY=PAKASNU: アイヌ語の学習と教育のために』1-65. 旭川: 北海道教育大学旭川校.
- 木村圭一（1954）「アイヌ地名から見た古代日本の鮭の分布」『東北地理』6(3): 78-85.
- 切替英雄（1984）「アイヌ語の名詞句の構造と合成名詞」『言語研究』86: 105-121.
- 切替英雄（2000）「頻出アイヌ語地名の形態論的構造」『アイヌ語地名研究』3: 105-142.
- 切替英雄（2005）「山田秀三のアイヌ語地名研究（講演記録 企画展「アイヌ語地名を歩く: 山田秀三の地名研究から」記念講演会「アイヌ語地名研究をめぐって」）」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』(11): 200-218.
- 切替英雄（2007）「アイヌの地理的認識と上（かみ）と下（しも）」津曲敏郎（編）『環北太平洋の言語』14: 35-56.
- 小木亜紀子・菊地真・古谷尊彦（1998）「北海道アイヌ語地名に見られる人々と自然環境との関わり: 河川・崖の地名を例として」『季刊地理学』50: 103-113.
- Lakoff, George and Mark Johnson（1980）*Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W.（1993）Reference-point constructions. *Cognitive Linguistics*. 4: 1-38.
- Levinson, Stephen C.（2003）*Space in Language and Cognition: Explorations in Cognitive Diversity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Levinson, Stephen C.（2008）Landscape, seascape and the ontology of places on Rossel Island, Papua New Guinea. *Language Sciences* 30: 256-29.
- 松本成美・白糠地名研究会（1983）『アイヌ語地名と原日本人: 先住者の心をたずねて』現代史出版会.
- 南哲行（2014）「アイヌ口碑伝説等により伝承された大規模災害の検証と現在の防災・減災対策への適用性に関する研究」『北海道開発協会平成26年度助成研究』.
- 中川裕（1984）「アイヌ語の名詞と場所表現」『東京大学言語学論集'84』149-160.
- 永田方正（1891/1984）『初版 北海道蝦夷語地名解 復刻版』東京: 草風館.
- 松浦武四郎（著）丸山道子（訳）（1975）『十勝日誌 現代語訳』札幌: 凍土社.
- 松浦武四郎（著）高倉新一郎（校訂）秋葉実（解説）（1985）『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌』札幌: 北海道出版企画センター.
- エドワード・S・リード（著）細田直哉（訳）（2000）『アフォーダンスの心理学: 生態心理学への道』東京: 新曜社.
- 榑原正文（1998）「豊平川を中心とした石狩川水系の河川変遷とその周辺のアイヌ語地名について」『アイヌ語地名研究』1: 1-10.
- 更科源蔵（1966）『アイヌ語地名解: 北海道地名の起源』札幌: 北書房.
- 佐々木正人（1994）『アフォーダンス: 新しい認知の理論』東京: 岩波書店.
- 佐藤典彦（1977）「北海道のアイヌ語地名における頻用語」『地図』15(1): 11-20.
- 佐藤知己（2005）「アイヌ語地名研究と言語学」『アイヌ語地名研究』8: 153-180.
- 佐藤知己（2008）「アイヌ語千歳方言における合成名詞の構造」『北大人文研究』4: 55-68.
- 染谷昌義（2017）『知覚経験の生態学: 哲学へのエコロジカル・アプローチ』東京: 勁草書房.

- 鈴木明世・中谷礼仁（2016）「アイヌ語地名から見る現北海道沙流川流域における生活空間その変遷過程の解明：千年村研究その8」『日本建築学会大会学術講演梗概集』463-464.
- 田村雅史（2003）「アイヌ語沙流方言に於ける名詞の所属形と場所」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』6: 193-208.
- 田村すず子（1982）「アイヌ語沙流方言における上下を表す位置名詞」『言語研究』82: 1-28.
- Thornton, Thomas F. (2011) Language and landscape among the Tlingit. In Mark, David M., Turk, Andrew G., Burenhult, Niiclas and David Stea (eds.), *Landscape in Language: Transdisciplinary Perspectives*. Chapter 13, 275-289. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- 山田秀三（1984）『北海道の地名』札幌：北海道新聞社.
- 山田秀三（1993）『東北・アイヌ語地名の研究』東京：草風館.
- 山田秀三（1995）『アイヌ語地名の輪郭』東京：草風館.
- 山田秀三（2000）『北海道の地名（アイヌ語地名の研究：山田秀三著作集）』東京：草風館.

執筆者紹介

氏名：井上拓也

所属：近畿大学理工学部

Email：takinoue@kindai.ac.jp